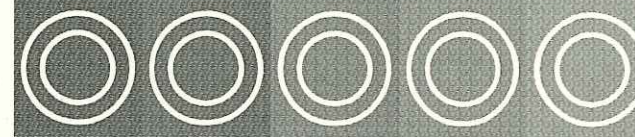


創世ホール通信 No. 275

催し案内 + 文化ジャーナル
2017年12月1日発行 ■北島町立図書館・創世ホール
電話088・698・1100◎ファクシミリ088・698・1180
771-0207◎徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91◎



徳島レインボー映画祭

「パレードへようこそ」「追憶と、踊りながら」

12月9日(土) 16時～20時半 (15時半開場)

会場●2階ハイビジョン・シアター

入場料●前売/一般2000円、18歳未満1800円(前売当日共)

作品●「パレードへようこそ」(2014、英国、121分)、

「追憶と、踊りながら」(2014、英国、86分)

主催●徳島レインボー映画祭実行委員会 (豊永☎088・652・1270)

共催●北島町立図書館・創世ホール

■徳島レインボー映画祭は、様々な人間の性のあり方(セクシャルティ)をテーマにした映画祭です。この上映会を通じて人間の性は多様であることを身近に感じ、多様な人間のあり方が尊重されることを私たちは願っています■「パレードへようこそ」は、ストライキ中の炭鉱労働者支援に立ち上がったロンドンのL G S M (ゲイとレズビアの活動家)の若者たちと、ウェールズの炭鉱労働者の交流を綴る感動作。英国サッチャー政権下で起きた実話が、1980年代の名曲をバックに描かれています■「追憶と、踊りながら」はベン・ウィショー(「007スカイフォール」「クラウド・アトラス」)が主演を務めた人間ドラマ。ロンドンの介護ホームで過ごす年老いた母親とその息子、そして彼の恋人のイギリス人青年が織りなす人間模様を描く。



2017年度北島町青少年健全育成講演会

寮美千子講演会★詩が開いた心の扉

～奈良少年刑務所での試み

12月13日(水) 13時30分～

会場●3階多目的ホール 入場無料

講師●寮美千子(作家、詩人、奈良少年刑務所社会性涵養プログラム元講師)

演題●「詩が開いた心の扉～奈良少年刑務所での試み」

主催●北島町、町教委、町青少年健全育成町民会議(問☎088・698・9812)

■2007年、作家・寮美千子は、奈良少年刑務所での社会性涵養(かんよう)プログラムの講師を、ためらいながら引き受けた。そこには童謡の「ぞうさん」を知らないまま育った少年(受刑者)がいた。彼は幼稚園にも小学校にも通っていなかったのだ■詩作とその詩への感想を述べ合う授業で、彼らは感受性をはぐくみ、情豊かに変わっていった。その苦闘と軌跡を当事者が語る。

フクシマ・トクシマ連帯映画祭

遠藤ミチロウ監督主演作品「シダミョウジン・最終版」

上映会 + 監督挨拶 + ライヴ

12月16日(土) 18時30分～

会場●2階ハイビジョン・シアター

入場料●前売2000円(当日2500円)

作品●「SHIDAMYOJIN(シダミョウジン/羊歯明神)」最終版

(2017年、日本、71分、ドキュメンタリー) 出演=遠藤ミチロウ、伊藤多喜雄、木村真三、福島県志田名(しだみょう)地区のおじいちゃんおばあちゃんほか 監督=遠藤ミチロウ、小沢和史

主催●フクシマ・トクシマ連帯映画祭実行委員会(☎088・698・1100)

■吠え続けるミュージシャン・遠藤ミチロウのロード《盆踊り》ドキュメンタリー映画！■原発事故が生んだメルトダウン・ミュージック！■遠藤ミチロウは語る「盆踊りが蘇る！ 民謡が蘇る！ 東日本大震災、福島原発事故が壊したのは人々の生活だけじゃない。そこに生きる人々の心も破壊した。でも、自分達の本来の『祭り』を蘇らせることで、生きる希望を紡ぎだすことができるんだという熱意がバンド《羊歯明神(しだみょうじん)》を生んだ■故郷の福島で盆踊りにインスパイアされた遠藤ミチロウが繰り広げるアンブレラ・パンクの新たな形、これが民謡パンクだ！■ミチロウが追い求める祭りとは？ 本作は映画作家・小沢和史と組んだ遠藤ミチロウ監督作の第2弾！■当日は上映後に本人あいさつと、ライブもあります。



創世ホール名画観賞会 27

「湾生回家(わんせいはいか)」

2018年1月20日(土) 2回上映

①10時半～ ②14時～

会場●3階多目的ホール

入場料●大学生・一般/前売1000円(当日1300円)、小・中・高、シニア(60歳以上)の方は当日のみ1000円

作品●「湾生回家」(2015、台湾、111分) 出演=富永勝、家倉多恵子、清水一也ほか 監督=ホアン・ミンチエン エグゼクティブプロデューサー=チェン・シュエンルー

■我が故郷、わが台湾一。敗戦後、この日本に戻っても、いつも心は台湾にあった■湾生とは日本統治下の台湾で生まれた日本人のこと■歴史に翻弄され、台湾を離れた日本人一「湾生」。彼らが「故郷」に寄せる積年の思いを描いた傑作ドキュメンタリー■湾生たちは自分たちの存在が歴史の闇に埋もれ、忘れ去られようとしている中、台湾への深い思いを語り続けます。歳月の壁と闘いながら、家族や友人たちを、共に過ごした場所を、心に留めおくために幾度となく台湾に向かいます。時間と空間を超えた人間同士の友情と家族の絆の物語■感涙必至。北島町中村の富永勝さんも冒頭から出演しています■各回上映前に富永さんの舞台あいさつあり。この機会をお見逃しなく！

サエキけんぞう講演会

日本にロックができるまで

ムッシュかまやつ、大瀧詠一、加藤和彦

パイオニアたちの知られざる闘いを語ろう！

2月4日(日) 14時30分～

会場●3階多目的ホール 入場無料

講師●サエキけんぞう(アーティスト、作詞家、千葉県在住)

演題●「日本にロックができるまで！～ムッシュかまやつ、大瀧詠一、加藤和彦～パイオニアたちの知られざる闘いを語ろう！」

主催●北島町立図書館・創世ホール

特別協賛●徳島大学歯学部、(株)リットーミュージック、(株)アビック、いぬん堂、テレグラフィファクトリー

■現代の日本はJ-POP時代。J-POPの原動力はロックだった。そのロックは一夜にしてできたのではない！■ロックを切り開くために苦闘した先人たちの知られざるエピソードと、貴重音源を紹介しながら、日本ロック創生期の真実を解き明かす■徳島大学歯学部出身の俊才・サエキけんぞうが、第二の故郷・徳島で今縦横に語る日本ロック誕生秘話！■貴重な機会です。お聴き逃しなく！

文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

今後の創世ホールの催しについて

■12月から来年2月までの主要な催しについてご紹介します。先月号で、「徳島レインボー映画祭」「寮美千子さん講演会」「遠藤ミチロウ・SHIDAMYOJIN上映会+ライブ」については触れているので、それらについては簡単に記述し、ここでは「湾生回家」上映会とサエキけんぞうさん講演会を詳しくお知らせします。先月号と合わせてお読みいただくと、より立体的に催しのご理解ができると思います。(小西昌幸)

【徳島レインボー映画祭「パレードへようこそ」ほか】

■12月9日(土)16時から20時半まで、2階ハイビジョン・シアターで開催。「徳島レインボー映画祭」(英国映画「パレードへようこそ」「追憶と、踊りながら」2作品)は、徳島県内に住む有志の方々による手作りの映画会です。約1年前、2016年11月に徳島県総合福祉センターで「さとにきたらええやん」という映画作品の自主上映会があり、私も参加しました。レインボー映画祭はその上映会の関係者が行なう上映会です。「さとにきたらええやん」は、大阪釜ヶ崎にある子どもたちの交流センター《こどものさと》のドキュメンタリーで、立派な内容でした。特に子どもたちがホームレスのおじさんたちに冬の深夜、温かいお味噌汁を配って回る情景には驚きました。真のボランティアの実践がそこにありました。この子どもたちの取り組みは後にNHKも朝のニュースで、取り上げていました。

■実は昨年この映画上映会のときに私は主催者の方から、いくつか相談を受けました。この種の催しは赤字を出しては意味がなく(活動を継続させるため)、そのためにも集客が大事なのだが、それがとにかく大変で、そのためにも様々な方法で宣伝することが重要なのですが、職業柄(?)私はこの種の相談を受けることが多いのです。映画の題材からいっても貧困や人権問題に関わる内容なので、私は人権問題を扱う公営の連絡拠点に行けばよいのでは、と助言しました。ところが、後で話を聞いて驚いたのですが、そこでなんだか冷たい対応を受けたようなのです。どうやら、窓口対応した人たちはこういう映画のことを知らないの、既存の団体でないボランティアの女性たちの取り組みを少し軽く見てしまったのではないかとされます。人権にかかわる部署の人が偏見や先入観を持ったり、窓口をたらいまわしにしてどーするのかね、という情けないお話です。とにかく私はその報告を受けて、実行委員会の人たちに申しわけない気持ちになりました。ですから、ささやかでも広報のお手伝いをし、上映会当日には、会場に足を運び映画を拝見し、感服したという次第です。その後、今度は性的少数者をテーマにした映画上映会を当館とあわぎんホールですということでお手伝いをしているわけです。

【寮美千子さん講演会「詩が開いた心の扉」】

■12月13日(水)13時30分から北島町青少年健全育成講演会として寮美千子さんが講演。私(小西)が講師紹介をすることになっています。前号で書いた、創世ホールとのご縁なども関連付けて、竹内博や池田憲章や寮佐吉や海野十三などの名前も登場する内容に仕上げるつもりです。首尾よくいくでしょうか。

■11月11日には、キョーエイ鳴門店4階での講演を北島町青少年健全育成町民会議の春藤千恵子会長と聴講してきました。打ち合わせも出来ました。

【遠藤ミチロウ・ドキュメンタリー映画上映会+監督あいさつ+ライブ】

■12月16日(土)18時半から開催。数えてみると当館でのミチロウさんのイベントは、ちょうどこの日が10回目です。どうか、皆さん、多数おこし

ください。先日、遠藤賢司さんがお亡くなりになりましたが、共同通信の記者が書いた追悼文には、遠藤ミチロウさんのコメントも載っていました。お二人は、時々、遠藤兄弟と称して共演ライブをやっていたのです。この催しは、福島復興祈願・連帯の意味合いとともに、遠藤賢司さん追悼の思いを込めたものになると思います。今回上映するのは、「SHIDAMYOJIN」最終版です。ほとぼしるエネルギーをご堪能ください。

創世ホール名画鑑賞会「湾生回家」上映会

■2018年1月20日(土)10時半からと14時からの2回上映。この映画は立派な作品です。私(小西)は、2016年に徳島市のユーフォーテーブルシネマで上映された際、足を運びました。優れたドキュメンタリー映画であり、非常に様々なことを考えさせられ、胸を打ちました。

■映画に登場する富永勝さんは北島町中村在住の方です。台湾で生まれ、青春時代を過ごし、20歳の時に日本に引き揚げてこられたのです。この映画の企画打ち合わせで富永さんのおうちには、監督が数日間お泊りになったということでした。

■多くの人にはなじみがない言葉ですが、「湾生」とは――。下関条約が締結された1895年から1945年までの50年間、日本が台湾を統治していた時代がありました。そして日本から数多くの人々が台湾に渡り、暮らしていました。公務員、企業の駐在員、農業従事者(移民)などなど。その時代に、台湾で生まれ育った日本人の人たちを湾生と呼ぶのだそうです。その数、20万人。その人たち(=湾生)の殆どは終戦後(敗戦後)日本に強制送還されました。

■この映画は、湾生たちの祖国=《台湾》への郷愁あふれるものとなっています。複雑な歴史に翻弄されましたが、生まれ育った風景への郷愁や現地で共に遊んだ幼馴染の友人などへの懐かしい思いは、人がどこに住もうが普遍的に共通するのだと思います。

■映画を見ながら心の奥底からにじんできたのは、台湾の人たちへの深い感謝の気持ちでした。彼らは、日本から訪れた湾生たちをととても温かく迎えてくれます。例えば、台湾の行政事務所に行き、自分のルーツとなる資料(住民票や戸籍など)を探そうとする人に対して、すごく親切な対応をする情景が私には印象に残りました。はるばる台湾に尋ねて来た日本人(湾生)のルーツが分かるような資料を熱心に探索し当該資料(戸籍や住民票などの資料)を渡してくれるのですが、そのほかに特別にお渡ししたいものがありますと言って、メモリアル・プレート的なものを手渡してくれる場面があるのです。とても粋な計らいで、私は感激しました。私は画面に向かって、日本人のためにこんなにご配慮いただいて、ありがとう、すみませんと心の中で言わずにいられませんでした。遠くから来た古い友人をもてなすように、きめ細かな心配りと情愛がそこにはありました。今の日本で、果たしてお役所の公務員が、そんなことをするだろうか。法律や条例にはそういうことをしなさいとは一行たりとも明文化されていませんから、特別サービスのことは一切、何にもしない可能性が高いと思います。私は、同じ自治体労働者として台湾の行政府の人に負けたと感じました。

■映画の終わり近く、大きな会場で湾生たちが感謝状を受け取る場面が出てきます。その時、舞台上でそれを受け取りながら富永さんたちがこみあげる涙をしきりにぬぐっておられたのが印象的でした。

■映画会では各回の上映に先立ち、富永勝さんのご挨拶もあります。

■前にも書きましたが、今年(2017年)2月、四方田大彦さん講演会の際、催し前日に空港に到着した四方田さんを徳島市内までお送りする車中の中で、氏が突然この映画のお話を始められたので驚きました。この映画のプ

ロデューサーは、日本に留学していたことがあり、なんと四方田さんの教え子なのだということでした。日本語ペラペラでとても優秀な方だということでした。

■「湾生回家」上映会にご期待下さい。

サエキけんぞう氏講演会「日本にロックができるまで〜ムッシュかまやつ、大瀧詠一、加藤和彦」

■2018年2月4日(日)14時半から3階多目的ホールで、サエキけんぞうさんの講演会をします。

■創世ホールでは、書物文化、テレビドラマ、演劇など様々な角度から日本文化史を俯瞰する(あるいは特定の分野で大きな足跡を残した個人の業績をたどり日本文化史に位置付ける)講演会を続けてきました。これらによってもう一つの(独特で巨大な)日本文化史を描きたいというのが、私の壮大なたくらみなのです。長く継続する内に、いつか戦後日本の大衆音楽を取り上げなければならないのではないかと考えるようになりました。それは、具体的には1960年代終わり頃にブームとなったグループサウンズ(GS)の人脈が以後の大衆音楽にいかに大きな影響力を持ったか、という問題提起です。ごく一例をあげると、日本を代表する歌手の一人沢田研二さんは元タイガース、そのバックを長く務めた井上堯之さんは元スパイダース〜PYGで映画音楽やテレビドラマの音楽も幅広く手がけた。井上陽水作品の編曲は元モップスの星勝。同様に中島みゆき作品は元《愚》の瀬尾一三。少し考えただけで、このあたりのことは誰でも気が付くことです。

■実は、私は7~8年前からこのあたりのことを課題として考えて、候補者の絞り込みと検討を続けてきました。しかし、やっかいなのが、それらのシーンの当事者の方々がどんどん体調不良になったり、お亡くなりになっているという厳しい現実でした。この構図はあたくも佐々木守さんを取り上げようとしたら、ご本人も実相寺昭雄さんも相次いで世を去ったという、あのときと似ています。ならば、ここは後継世代の優れた理解者・研究者による先人への深い尊敬を込めた取り組みがよいのではないかと。ちょうど佐々木さんのときの池田憲章氏のような存在。思案に思案を重ねて、そうだ、すぐそばに古い大切な知人がいたと思い至りました。ハルメンズ〜パール兄弟のヴォーカリストで作詞家のサエキけんぞうさんがいるではないか。彼なら徳島大学歯学部ご出身だし、徳島とゆかりがあり、坂田明さんを始めてお招きした催し(日本文化デザイン会議関連)で創世ホールとも大きなご縁がある。サエキさんご本人が歌手であり、沢田研二や小泉今日子など多くの大衆音楽への歌詞提供という現場の実作者であり、その上、音楽批評家・紹介者として音楽雑誌に多数執筆し著作も多数ある著述家という面も備えた、これ以上ないような逸材です。灯台下暗し。私は深く反省し、サエキさんの講演会を決意したのでした。

■多忙な方なのでスケジュールだけが心配でしたが、早目のコンタクトが奏功し、ここに実現の運びとなったわけです。

■12月初めにチラシ、ポスターも無事完成しました。来年1月早々に上京するのでサエキさんと打ち合わせしてきます。思えば、今年3月に「デヴィッド・ボウイ is」展(寺田倉庫ビル)と「パロディ、二重の声」展(東京ステーションギャラリー)をハシゴし、パロディ展会場でサエキさんと合流して色々話し込んだことがあったのですが(「創世ホール通信/文化ジャーナル」2017年4月号参照)、その時にかまやつひろしさん(ムッシュかまやつ)の「真珠の涙」がいかに名曲であるかを、私たちは語り合ったわけです。もしかしたら、その時既に天空の彼方の大衆音楽の神々の世界から、この講演会開催が運命づけられていたのかもしれない。(20171212脱稿)